

人間は「考える足」：仏足石について

人間は「考える葦」とは、脳で思考する人間を自然の生物の中で最も弱そうな葦に例えた言葉であるが、この脳中心主義に対する反論がある。人間として存在する以上、行動して、「考える足」じゃなければならないという。

2本足で立つ、そして動く、働くことから思考が進む、新しい発想や問題の解決ができることを、精神分析の結果から多くの事例が示されている。だから老後の座学はほどほどにするのがいい。足を使って歩いて、よく見て、多くの先学の話聞くことが大事で、脳の活性化になる。足の衰えが、脳の認知症の始まりとなる。考えることと足の動きは同期しているようだ。身体の動きが衰えてきたら、頭のはたらきも鈍くなっていく、という。

仏教では「解学」と「行学」の2つの学びの道があると示されている。「解学」はもっぱら書物を読んで勉強したり、ネットで調べたり、パソコンの知識を得たりすること。一方「行学」は、その学んだことから一歩踏み出して行動することであり、他に働きかける、後から来る人に教えることなど、少しでも社会に役立つことをしようとするのである。雑用をきらってはいけない。人様のお役に立つことはいいことだ。

日々の生活の中に外に向かった行動があることが大事だ。例えば、パソコンの講座で人に教えたり、そのテキストを作ったりすることで、少しでも今までにない新たな出会いのようなものがあることは楽しい。

ハイキングをしたり、散歩したりするのもいい、出会った人と挨拶を交わすだけでも、爽やかになるものだ。自然の草花が日々変化する菜園づくりも楽しい。

ものごとを調べ学ぶ解学と、学んだことにより行動が起こる行学は別々に2つあるのではない。表裏一体のものでなければならない。これを「解行一如」と示されている。解学する頭と、行学をする足とが一つになって「考える足」の人がいる。

右の写真はブッダがさとりを開かれた成道の地インドのブッダガヤ大塔の正面にある仏足石である。今日あるような仏像はブッダが入滅してから200年ほど以後の紀元1世紀末のころ、ガンダーラ地方で初めてつくられたという。ブッダが入滅して、仏像を崇拝するようになる以前から、仏教徒がブッダの超人性を示す仏足石を拝した心がある。日本には、奈良の薬師寺の金堂には国宝となっている仏足石が安置されている。薬師如来の坐像の足裏に、千幅輪とよばれる文様が描かれていて見事だ。



インドのブッダガヤ大塔にある
仏足石